

一月のテーマ
一年のはじめに



え・小島サエキチ

無用な己に 立ち返る

年

が改まったこの機会に、昨年までの生活指針や実践

目標を振り返り、できたこと、できなかったこと、成果の出たこと、出なかったことを鑑みて、新たな方向性を構築し直した方もいるでしょう。それは「リセット」という感覚に近いのかもしれませんが、リセットという言葉を聞くと、

一見、コンピュータゲームのリセットボタンのように、「やりなおせばいいじゃん」的な安易な表現にも聞こえます。

しかし、私たち日本人は、そもそもリセット民族なのかもしれない——そう指摘するのは、能楽師の安田登氏です。

たとえば、伊勢神宮の式年遷宮のように、「古くなったものは新しく作り変えた方がいい」という考え方が、日本古来からの思想にあるというのです。

氏は著書の中で、「あらた」「あらたまる」という言葉は、「生る(ある)」「生まれる」から生じた言葉だと述べています。

『あらた』とは、そこに何らかの

変革があつて、もう一度生まれ直すことだ。まさにリセットだ。そして、それはすばらしいことだという考え方も日本にはあつた

『ワキから見る能世界』(NHK出版) また、能楽師として、世阿弥の後輩にあたる氏は、「初心忘るべからず」の「初心」について、こう解釈しています。

「初心の『初』とは、衣偏に刀で、まっさらな布地にはじめて鉄(はさみ)を入れることを言う。ならば、『時々の初心』は、人生の各ステージにおいて、自分の身に鉄を入れていって、過去のしがらみを切り、新たな生を生き直すことを言い、これが芸ならば、新たな芸境に入るために、自身をばっさり切る、その大切さを言う」

日本人には馴染みの深い「水に流す」「禊」などの言葉も、時をあらため、区切りの良い頃合に、「生まれ変わったつもりで挑んでみる」という再びの決意を示すことに結びつく、と氏は言います。

「リセット」の語義は、機械や装置などを再び始動の状態に戻す

こと。自分でない何物かが対象の言葉です。しかし、私たちのリセットは、己自身が変換することが求められます。純粹倫理の実践に置き換えるなら、それは、「捨てる」実践に他なりません。

変わることも、捨てることも、あらためてゼロ地点(ニユートラル)に立つことであり、無用な己に立ち返ることです。

現状維持に執心したり、過去の評価や実績にしがみついたり、引きずったりするのではなく、「自分は何者でもない。裸一貫、どんとこい」と思えるかどうか。無用な己に立ち返って、「自分を改めよう」という肚を固められるかどうか。それが、新たな生を生き直すということでしょう。

一月も残り僅かとなりました。捨てる作業は、何も年末だけに限って行なうことではありません。新たな地点に立って、スタートする際にも必要なことでしょう。

じっくりと心を落ち着けて考える時を持ち、今年一年の進む方向を今一度見定めてまいりましょう。